新しい境地を拓いた、として高く評価される「私はどこに生まれたのか」は、代表作のひとつ。モンゴルの美しい自然と、そこに暮らす人々の心に刻まれた伝統や習慣などを余すことなく伝えながら、それらを「支配して」生まれたことの喜びを高らかに謳いあげる作者。この作品が人々に愛される理由は、厳しい思想統制のあった時代に書かれたのにも拘わらず、そうしたものを超えた清々しさと晴れやかさが感じられるからだろう。「この詩を読むとき、どこかにある素晴らしい国、ではない、ただこのモンゴルの地が目に浮かぶのである」とモンゴルの評論家の一人が言うように、天上から地上へと自在に翔けめぐる俯瞰的な視点と、露の雫にきらめく星々をみつめる細やかな感受性、その根底にゆるぎなく存在する故郷モンゴルへの深い愛情と誇りが、この詩にはのびやかに生き生きと謳われている。「私はどこに生まれたのか」が主に空間の移動を鮮やかに描いていた、とすると、「私がこの世に生まれたわけ」は、時間軸、人の一生に焦点をあてた構成になっているといえる。この世に生まれ、育ち、やがて自分の果たす役割を自覚して、詩人として生きていくこと、祖国への愛を詩によって伝えていくのだということを彼は力強く語りかける。だからこそ、わたしが生まれたのには意味がある、と。それは自分自身の、未来へのプログラムであった、と自ら語っているように、この詩は常に彼の人生の道標となった。やさしい言葉で綴られながら、味わい深いこの詩には、無邪気で罪を知らなかった少年期への胸の痛みや、報われなかった初恋のほろ苦さ、人の親となって知る喜びと哀しみ、言いかえれば、人生の光と影、それらすべてを含めて、「一つ一つさだめ通りに　自ら味わおう」という彼のふところ深い人生観が表されている。モンゴルの詩では「音」と「律」がとても重要な要素となるのだが、ヤボーホランの詩、とくに妻に捧げられた多くの優れた恋愛詩などを原語で読むと、ことばのひびきとリズム感が一体となって流れ出し、あふれんばかりの愛情のゆりかごにゆられ、まどろむような心地にさせられる。彼の詩には曲がつくられ愛唱されているものが多いが、ここに紹介した二編の詩も後に作曲家によって曲がつくられ歌になっている。

（阿比留美帆）





# デンデビーン・プレブドルジ

〔内田敦之 訳〕

## チンギス

テムジンは　弓から生まれたわけではない
テムジンは　鏃から生まれたわけではない
テムジンは　ホエルン・エヘ▼(1)から生まれたのだ
テムジンは　無敵の歴史から生まれたのだ
安らかでなく　悲しみの涙であふれた世界で
救われることもない　何世代ものむかし
仇恨の揺籃でイェスゲイ▼(2)の息子が育ち
軍神によって九本の御旗を祀ったのだ
獺色をした羚羊の背中のように輝くハルハ草原に
蹄型の白い焼印のようなゲルを彼は建てたのだ
オノン河▼(3)のほとりで豪雨のように群がる馬群の

(1) ホエルン・エヘ　イェスゲイの正妻で、チンギス・ハーンの生母。「エヘ」は「母」の意味。

(2) イェスゲイ　イェスゲイ・バアトル。チンギス・ハーンの生父。

(3) オノン河　ヘンティー山脈にあるモンゴル民族発祥の聖地を源とする三つの河のひとつ。シルカ河、アムール河を経由して太平洋に注ぐ。

二頭の聖なるザガル馬▼(4)を銀の霜が降りる季節に調教したのだ
母なる地を領有した三本の鉄枠
血筋のものどもを守った四つの脚を拠り所に
新生国の支柱を天窓の枠につき立てて
独立モンゴルの礎を彼は築いたのだ
全智全能の天の両翼に
星のごとく散った各部族の祖先を祀り
滅びの危機がせまる時の混乱に
盾で武装した大モンゴルが動き出したのだ
苦難の時代の力、峻厳な道を守り
大荷車の車輪を押しすすめて
駿馬が跳ねた母なる地の十字路に
遙かに長くのびる白い砂煙を立てたのだ
蒼きモンゴルの激しき嵐を分かちながらも
下唇を噛みしめた世界はチンギスの前に跪いたのだ
駿馬の蹄は洋の東西を貫きとおし
素足の世界は余燼を踏みしめたのだ
そうだ！　戦いの道に白い乳が流れることはなかった
そうだ！　戦士の志気は時を経ても忘れられることはない
そうだ！　チンギスは雄壮なアルタイ山ほどにその名を知らしめたのだ
そうだ！　チンギスは今日においても名をとどろかせているのだ

(4) ザガル馬　写本と口頭伝承で伝わる「チンギス・ハーンの二頭の駿馬の物語」という叙事詩に出てくるザガルという毛色の駿馬で、大体淡黄色の馬を指す（地域により認識に違いがある）。



後世に彼が間違いを犯したということはない
度々襲う干ばつにもオノン河は涸れなかった
チンギスの大モンゴルは疲弊し、苦悶し、雲散した
あなたの蒼きモンゴルは勝利し、発展し、興隆した
いずれにしても　チンギスがガルーダの如く飛翔し
罪と功績を後世に残したのだ
長い年月　水火にうがたれたこの世界に
剣の刃で〝モンゴル〟と記したのだ
チンギスは　弓から生まれたわけではない
チンギスは　鏃から生まれたわけではない
チンギスは　ホエルン・エヘから生まれたのだ
チンギスは　無敵のモンゴルから生まれたのだ

（一九六二年）

**デンデビーン・プレブドルジ** Dendeviin Pürevdorj（一九三三年～）

**【作家紹介】**
現在のウブルハンガイ県ブルド郡生まれ。マルクス＝レーニン主義夜間大学、一九六四年ゴーリキー文学大学を卒業。現代社会を描いた長編叙事詩で有名で、一九六九年作家同盟賞、一九八一年国家賞、一九九六年「人民作家」の称号を得る。主な作品は「黄金の秋」（一九五四）、「独立」（一九六三）、「黒い雪」（一九六八）、「青い木綿の夏服」（一九六九）、「神々と人々」（一九八六）、「チンギス信仰」（一九九〇）など。

（内田敦之）

**【作品解説】**
チンギス・ハーンは社会主義体制下の一九三〇年代末以降否定され続けたが、六〇年代初頭に短い雪解けの時期が訪れた。一九六二年五月にチンギス・ハーン生誕八〇〇周年記念大会が開催され、それに向けて民族色の濃い詩や小説が多数登場した。この詩もその流れの中で出てきた作品で、「残虐な侵略者」とタブー視されたチンギスは、過酷な戦いが日常であった時代に歴史の必然性が生み出したということをうたっている。（内田敦之）

モンゴル文学への誘い

2003年10月28日　初版第1刷発行

編　者　芝山　豊
　　岡田和行
発行者　石井昭男
発行所　株式会社 明石書店

〒113-0034　東京都文京区湯島 2-14-11
電　話　03（5818）1171
ＦＡＸ　03（5818）1174
振　替　00100-7-24505
http://www.akashi.co.jp

組版　明石書店デザイン室
印刷　モリモト印刷株式会社
製本　株式会社難波製本

（定価はカバーに表示してあります）　ISBN4-7503-1808-6

# МОНГОЛЫН УРАН ЗОХИОЛ

## Гарчиг

Өмнөх үг

Нэгдүгээр бүлэг：Орчуулга

I. Монголын орчин үеийн яруу найраг
Ч. Чимид
Б. Явуухулан
Д. Пүрэвдорж
Р. Чойном
О. Дашбалбар
Б. Лхагвасүрэн
Ц. Хулан
Б. Галсансүх
Д. Банзрагч
〈өвөр монголын яруу найраг〉
На. Сайнчогт（Сайчингаа）

Монголчуудын хэрэглэж ирсэн бичгүүдийн тухай

II. Монголын хүүхдийн уран зохиол
Ж. Дашдондог《Долоон бөхтэй тэмээ》
Д. Гармаа《Хөгжөөнтэй туужууд》

Аман зохиол

III. Монголын орчин үеийн шог зохиол
Б. Цэнддоо《Онигоо》

Жүжиг ба уран зохиол

IV. Монголын орчин үеийн өгүүллэгүүд
Д. Төрбат《Могойн чуулган》
П. Баярсайхан《Хөх туурийн тал》
Шаг. Цэнд-Аюуш《Хэцүү амьтан》
Ч. Лодойдамба《Миний хээр（хуучин цэргийн яриа）》
Ц. Дамдинсүрэн《Бух Гомбо》
Д. Нацагдорж《Харанхуй хад》
〈Хальмагийн уран зохиол〉
Балакан Алексей《hурвн зург》
〈XIX зууны Монголын уран зохиол〉
Инжаннаш《Нэгэн давхар асар》